

奄美民俗文化の事例～徳之島井之川和田キヨ姫の生活史（４）～

著者	本田 碩孝
雑誌名	奄美ニューズレター
巻	34
ページ	50-63
別言語のタイトル	An example of the dissemination of Amami folk culture - the life history of Wada Kiyo from Inokawa on Tokunoshima (4)
URL	http://hdl.handle.net/10232/00000937

■しまゆむた

奄美民俗文化の事例

～徳之島井之川和田キヨ姫の生活史（4）～

本田 碩孝（徳之島郷土研究会会長）

凡例

ほとんど標題の「和田キヨ姫の生活史（1）～（3）」（奄美ニューズレター NO. 31鹿児島大学奄美委員会2007年6月刊以降）に準ずる。

0、はじめに

1991年1月1日に御教示いただいた残りの項目を紹介したい。特に**戦争関係**の話には、記録に残っていないのが多い。人々の生活史に多大な犠牲を強いながら、実態さえ十分に明らかでない。法に決められているという根拠に戦争への道が再びこないためには実態を記録に残して学び、平和のために実践していかなければならないことは多い。集団自決など軍命令が関係ないなどという言説がある。そうせざるを得ない心情をたたきこまれる教育の恐ろしさを感じる。奄美の小さな島々で戦闘に足手まといになる庶民は一箇所に集合することが決められていたことが伝承としてある。喜界島（注）では洞穴に井之川ではテングシの、ターバチヤマ、タカバチ（井之川岳の後方のどこか）集合が知らされていた。

志願は、「こころざしねがうこと。ある事をのぞみ願い出ること『広辞苑』」であるが、志願兵も応募しなければ警察に呼び出されて「なぜ志願しないか」と厳しく問いただされたと言う。これは命令に等しいことではないか。警察官の何人かが代わって問うと一人が命令したことにはならないだろうと思う。14歳ほどの少年が一人個室に閉じ込められかわるがわる警察官から犯

人のように問われると行きたくなくても志願という形を選らばざるを得ない。特攻兵も形は志願だと生き残りの人が記録に残していた。いくつかは生活史の聞き書きをしており報告する機会もあるだろう。

注

英啓太郎「『集団自決』を奄美に問う」（上・下）「竹槍訓練と“カミソリ自殺”」、「島にもあった“暗い記憶”」（南海日日新聞2007年7月12日・17日）英氏は喜界町『坂嶺集落誌』編集他。

項目

1 井之川に落ちた爆弾、2 焼夷弾と機銃掃射、3 家が燃えた前後、4 出産前後の家づくり、5 二女の出産、6 官員と薪採り、7 官員と材木、8 田への水引き、9 草刈り、10 紬織り始め、11 夫の労働、12 背負い売り、13 収入の事例、14 お茶を、15 空襲で燃えた

1、井之川に落ちた爆弾

うがしし やらはったんちえっ。

うがしあしが、ふーう、酷い目ーおーていよ。うんから20キロ爆弾、ていーちや、うんちゅんきゃしー。うんか また、ていーちや、ナオキチぼー（町田直吉氏・故人）たが、かどうぐちぬ、トゥミシギぐわ（本田富重氏・故人）たがえっ。やんくしあらんぐとうに、道ぬえっ。ていっちや、うがん。ていーちや、また、イジリシュぬはなちま はんとうち めいーちっきふがち、「あねー、かんま はんていとうんでえー」ち言ち。っわっきゃ まりからにちゃしがえっ。うりや、20キロ爆弾

あたんちよ。ついやーきゃ コーバラかち
ま ていちな はんていてい。うがん は
んとうしゅんちぬむん。はんとうしそこね
てい。

「石ちつき割ていあん」ち、ブンイチめい
や、言ゅーていだ。ムキナぬばー（富澤タ
ラ姫・故人）たが、オクマタぬ さー。こー
えっ（山かちま はんとうせたわ）。ぬが
ちか、うがん はんとしゅんちま、方か
くまちげーし。ぎりーぎり回りちゃげな、
あつきちゃげなどう はんとうしなてい
やっ。うがんま はんとうちあんち言ゅー
たんちよ。

（意識）戦時中に井之川にも爆弾が落とさ
れた。夜、夫婦の疎開していた畑の小屋に
直撃弾が落ち即死だった。夜なので明りが
見えたからだろうと言われている。集落内
の町田氏と本田氏近くの道路。イジリシュ
（集落近くの海岸の瀬）の先に落ち穴をあ
けていた。後からわかった。20kg 爆弾だ
った。コーバラ（土地名、川の原、人家はな
いが疎開している人がいたかも）にも落と
してあった。旋回しながら落とすので誤爆
だろう。

2、焼夷弾と機銃掃射

——キノかちや、焼夷弾やはんとうさだ
ていや。

焼夷弾んま ちゃーかた はんていてい
ちよ。

——くわじや、せーらだていや。

くわじや、さーだてい。郵便局が、あむ
なーとうていよ。焼夷弾ぬ機銃やっ。

——焼夷弾ち言ゅーむんや、つまちぬ
めーりだれんだ。

つわっきゃ ヤドゥりんきゃ、むーる う
りし めーてい。うんから あげれぬにや
が、アキチュ（秋津、現在亀徳）からヤこー
てい。かどうぐちぬやぬ ゲンボー（藤田
源善氏・故人）がやぬうんな インヌブリ

ちくてい。むーる くんてち うんなち
でいあたんとう。うんから、爺とっわつて
が、トーヤマ行じ、サタし柴。栄ちゃんは、
19年つまーり なていやっ、3ぐわちや。
どうんちゅら、テイルヲウーむっち、はん
ざりが行きあんせね。とうしや、つわーは
りや。うん柴マルキ、（お産後）はちかぶ
りから はんざいるたんだ。はちかぶりか
ら、栄ちゃん 産ーちげんから。うんか
ぎりーぎり ちだんしじあらや、やぬ ぎ
りーぎり。にやが、

「うーにやしが、サタダムンぎいりーぎい
り うちゅち あたんとう。うちゅち
ねーだていか めーらだだむ、うちゅち
あたんとう めーたん」ちゅてい。にやに
うっしゅてい 言ゅーていあらや。サタシ
ダムン うんな ちでいあたん訊い。むー
る めえーてい、ヤから、うがん。

（意識）「井之川に焼夷弾は落ちませんでしたか」と問うが、機銃掃射と間違えている
ようだ。機銃掃射でも茅葺き屋根などは燃
えた。家の近くにいた叔父（父喜志富の弟）
も亀徳から家を買って置いているときに燃
えた。父と二人で製糖用の柴を運んで家の
周りに積んであった。そのせいで火が付き
やすく、家まで燃えたと言われた。井之川
での瓦葺きの家などは郵便局など数えるほ
どしかなかったろう。

昭和18年11月頃に集落の3分の2ほどが
焼ける大火があった（注1）。それから復
興も十分でないうちの戦禍であった。

注

1) 「井之川大火を語る」（奄美民話集6『本
田メト姫の昔語り』拙編312頁）にメト姫
の体験談がある。昭和18年8月20日生まれ
の筆者の生後数ヶ月後のことであり、井之
川でも大事件であったが、十分な記録はな
されていない。

2) 昭和30年代まで家を買って移築した。実
家も母間から買った家であった。

3、家が燃えた前後

—うりや、19年ぬくわじだれんど・・・。

19年ぬ くわじあらんご、焼夷弾しよ。
焼夷弾し むーる。

—20年ぬ話 だれんじゃや。

なー、しーから17年、18年ぬ うーむあしえっ。

—栄ちゃんが っまーりとうれていか、
19年だれんだ。

っわっきゃ栄ちゃんや、19年っまーりな
ていやっ（おう）。あむが、終戦が20年な
ていやっ。じき うーむあしえっ。なっ、
敗戦ならんちぬ前よっ。うがし、うんから
うーにゃしが（「ほーう うむ うちとう
やっ」とテープレコーダのことを言う）。
「柴むん うかんごしか ヤーめーらだた
む」ち、うっしゅていんたな っ言やった
しがえっ。

うがし うんからどうえっ。うにん い
きゃしがやちか、栄ちゃん、っわっ、孕でい
しゅむなてい。19年ぬ1月生まれなてい。
サードウンバリぬマサオあまた ヤーな
をうたん訳い。キノぬうーくわじし。しか
18年ぬ11月18んち あんせね。うがし キ
ノぬむーる あむなてい。うんから っ
わっ、マサオあんたヤーかち。あんたや、
ユシテイルめいがやっ、うんかフクトウ
ユにゃが ヤーにんじゅぬ しっち、ヤ
んみー あたんとう。マサオあまがえっ、
「っいヤーきゃ、うがしあていか なーきゃ
ヤかちく」ち言ち。っわっきゃ、マサオあ
またヤな をうたんとう。

（意識）「何時頃に家が燃えたのですか」と
確かめている。昭和18年の井之川の大火事
のときには二女の妊娠中であった。佐渡の
豊永さん宅に避難していたが、他の親戚縁
者もきており、混んでいた。

4、出産前後の家づくり

うんか 爺（父・喜志富）がやっ、

「ふー、うぶに あむしーあてい。くわん
きゃあてい産—はっていか きゃーまるん
きい」ち。カンニぬ嶺先生が製糖場。あり
500ぬんし こーてい。うにんシュダぬ ツ
マしゅきゅんちゅ、ぬっちあたんがいー。
トーちがら ぬっちがら言ゅんちゅ あた
しが、ツマしゅっきゅんちゅぬ をうたん
ちよ。うりに500ぬんし たんでい キノ
かち。300ぬんしがら、いきゃさしがら
たんでい うるはちやっ。うるはち、う
り、ツヤ、ちくてい。さーや、いきゃしが
やちか、砂利はんげいてい。バンクま さ
んご。デー一切ち しっち。カキあーでい、
さーな敷ち。うんな畳い敷ち うんな をう
たん訳い、っわっきゃ。

（意識）父が、避難先の家で「出産された
ら困る」と。神之嶺の嶺先生が所有してい
た製糖工場を500円（？）で買った。諸田
の馬車曳きをしていた人を頼んで運んでも
らった。床などは竹を切って編んで敷き、
その上に畳を敷いて住んでいた。それが、
1年もならないうちに空襲で焼かれた。

5、二女の出産

（1）出産の前後

うがししやっ、っわっきゃ栄ちゃんや、
うん小屋なてい、19年ぬ1月はちか っ
まーれいりいむんなてい、っまーりたん
とう。うんか ふしゅちぎゅんちゅま をう
らん。産婆ち言ゅんむんま をうらん。う
がしさんとう、テイぐわあーまたが、山か
らタムンはんぎいてい きゅーたんとか
ら。うんか あんが、テイぐわあーまたヤ
なてい、

「キューぐわや、かし、くわー産ちゃしが、
ふしゅ ちぎゅんちゅぬ をうらんけい」
ち。テイぐわあーまに ふしゅ ちがしむ
んだ。うにんきゃ、ふしゅちぎま さっこ
どう、ちぎむんあしがえっ（笑いながら）。

やっぱり ちゅや、やっぱり いんくわ

り。うーむしゅしま ぬーしゅしま 寿命やっ。

ふーん、うがし うんなてい、くわーしよーとうてい、はちかぶりんたなま。いきゃしがやちか、ブラブラあしび なたんとうきや。

(2) 産後20日から

爺や、いきゃしがやちか、しかーじ、柴まるき はんげいてい テイルぬヲウし はんげいてい 来ーあんせね。たーまるき べんな くんぎよちやっ。わんにま よーり しゅららむなていち。はちかぶりから。うんから、テイルぬヲウとうチナむっち行じ。トー山ぬ まんなかち行じゃんとうきやがら、チャーかーた つわっ爺や、山ぬまんな なーじ あたんちよ。なじあむなてい うり くんてや、くんぎよち。あーとうき よーね、じき 遅くなていちゆぬ、うむなていげか つわっきや はんぎいりが行きゆたしがえっ。行きゆたしが、うんから、「トー山ぬ柴 むーる キシトウミ爺が どう はんげいとうん」ちゆてい。

(3) 敗戦後の山

うんから、いきゃしがやちか、きしゃ 敗戦なたんとうきやがやっ。井之川中学校ぬ、うま あむし 開発し。うんな あむつくりち 山なーじ めーちゃんせね。

うがし、うんな 太先生が、「なか10年後や、くま しっち むーる おーややっ」ち、話ち うーむ さんちぬ 話ぬあたしがえっ。うんなり むーる 散りじり なーていんね、うむなていやっ。

(意識) 二女は、その小屋で昭和19年に産まれた。産婆もいない(注1)。臍を繋ぐ人もいない。そしたら、母が叔母の家で「キヨは子を産んだが臍を繋ぐ人がいない」と言ったら、叔母が来て繋いでくれた。どのようにして「へそをつぐ」ことがおこなわれたか分からない。

やはり、人はいろんなことがあるが寿命による。20日間ほどブラブラしていた。

その間に父は、籠の紐で柴の束を運んでいた。束を2つずつたばねて運んだ。自分も家にばかりおれず産後20日目から柴の束運びに行った。朝夕かよって運んでいたら「トー山の柴を藤喜志富爺が運んでいる」と言われた。

それから敗戦になった。井之川中学校(注2)が開発のためだと言ってなぎ倒した後、焼いた。太先生が「10年後はここで会おう」と言ったという話であったがね。そのまま散りじりになれば分からない。

注

1)「ふしゅちぎ(臍つぎ)」は、親などがしたという。経験者がしたのだろう。昭和28年生の妹も家での出産だった。筆者などの記憶にある産婆は保井さんである。井之川では職業として成り立たなかったのか亀津に転出した。

2) 井之川中学校ではなく亀津二中学校だろう。昭和30年代の初期に学校林づくりで筆者なども昭和33年頃に行った。

6、官員と薪採り

(1) 薪採りと官員

うんから うがしぬまりじゃわ、M・Tがくわん員様なーとうたんせね。しゃんとう、うまが むーる焼かっとうむなてい。くんてや、エーノダムンはんぎいりがち行じゃんとう。うりが、つわっきや うーきやぶてい はんぎらさんごえっ。ついやーきやあじゃ、あま、つわっ、久子、つわっねっ。トー山かち行じゃんとう。うんなてい いきゃしがやちか、インバリぬ青年きや、サタダムンとうていち、むーる売りあんせね。Tめいたテルミた、うんじきぬ青年きややっ、ツルヒコめいた。むーるうんなてい待ちちゆてい 真んなていくーどうてい うりが説教しゅり。うんか

ら、たんががいー、たんががら、かし手いしえっ、かんきーなち、あがん行けち かし あべいるむなてい。

「ほーっ、焼きダムンあしが、とうりならんど」ち。うんから、また くだーり うりてい。うんから ユネイミチ坊が向こから あがん久子たが、うんキーカミぬ うがんいじてい、ユネイミチ坊が山かちいじてい。うまんきゃな タムンきゃ ねーみいちゃんてい タムンきゃ ねむあたしがやっ。うがしうりてい。うんから くだーり くんサラシンチジぬ うがん行じ。みんちらさーな あむぐわ ちっ切ち。はんぎいてい しーちゃんくとうんきゃぬ あむだ。うーたぐらってい 採りならんち 言やってい。

(2) 青年団の智恵

うがしさんとう 青年きゃ まるき何十ち しーあたんちよ、うね。キンバリ青年きゃやっ。うがし言ゆしが、ありが うがし言ゆーたんちよ。うり うさいらってい。青年きゃぬ くんじ あーむ。ありが うがし言ゆーたんちよ。

うがしさんとう、青年きゃぬ ゆる、むーる ごそーとう とうーてい。むーる 製糖場かち売てい あたしがえっ。

「ありに うっしゅてい っいやったんてい、ありに うむ さーるむや」ち。青年きゃ、また うっしゅん団体つくていんね、たまがるむんや ねーりやっ。

ゆる行じ むーる はんぎいかよち。むーる売たんち、話聞ちゃんちよ。

——テルミちか、たんだれんが。

テルミちか、ユシタキにゃが、ぬんがぬくわぬ、ナセながら をうーし、テルミち言ち。イッチャンがじき うっとうぬ、テルミち言ち。

(3) 配慮と恨み

うんから、うがしなてい わんがえっ。Tま しか部落ぬちゆにがり、「とうり、

とうりち、やーとや とうらんぐとうに はんげいてい かいり」ち とうらち たーむあしが。うんから うっしゅてい さんていぬ いーくとう さんぐとうに 東京行じ、いきやしさんがら、わーじに もーりしあたんせえっ。

(意訳) 伐採され、焼かれていた山に薪を採りに行ったところ、井之川の伊宝青年団員が官員に捕まって説教されていた。青年団員は薪を採り、砂糖製造する購入希望者に売っていた。どの青年かがここへ来るなと合図をしてくれた。それで、よけて他の山に行った。青年団員はすでに薪を束にしてあった。説教されたが、夜に薪運びに行き、背負いおろして売ったそうだ。開発のために焼いてあった木も官員から見れば官有林だったのだろう。青年団員は、アラジウチ(畑などの荒地耕し)なども引き受けて活動費を稼いでいた。薪採りも団費稼ぎの一環であったろう。官員は恨みを持ったのか若死にしたそうなの。

7、官員と材木

うんから、また、T・Hやっ。Hたが、また、いきやしがやちか。終戦後なたんとう。山行じ。ゆーあんせね。ターバラ行じ、赤松じゃら、松切ち、むーるケイタじゃら とうてい。ネイタじゃら とうてい。バンジョ金いたな むっち ちーあむ。くんでや、きーさ どうぬとうてい。うり うさいていえっ。「とうりな」ち。くわん員なてい。「とうりな」ち うさいてい。

いきやしがちか、うんから どうぬ とうーてい。うがしさんとう、ツヤつくたんせえっ。あーじゃたま 長生きさーだたんせえっ。ツヤつくてい すぐん もーりし あたんせえっ。

うんから、Fが、うんツヤこーてい しーあたしが。また、Fま わーじに。もーりさんせえっ。

うがしさんとうきやら、トシオにゃがとうんべしが行じゃんとう。うんからFにゃが・・・。

(意訳) 終戦後は、家をつくる材木なども山で切ってくるものだった。みんなが自分の山林をもっているわけではない。H達がターバラ(直訳・田原、地名)に行き、松を切って材木にしてあった。官員が捕まえ、没収して自分がそれを取り、家を建てた。そしたら父など長生きしなかった。その家を買って移築した人も若死にした。

俚諺に「ちゆぬ に一、は一めいがらちか い一くとうや ねん(人の気持ち痛めることをすると良いことはない)」と言う。官員が材木にしてあるのを横取りしたとみたのでしょう。それを使った家に住む人には良いことがなかったと解釈している。

8、田へ水引き

Fにゃち言ゆんちゆんきやま ほんともあしが、言葉や(ゆた一)。あきし、ニシバルなてい、久子がむん つわっきやしゆーたんとうやっ。言葉や、うりやうりや、も一う、上品な言葉し、正直にし、いきやしかしち ちゆてい ぜーとう。つわっきやが あき しゆーていか いきやしかしち言ちか。

うんから みいじはらし時期なたんげえか、つわっきやや、にちゃ はんげいとうてい。うん 上行じ、めいめい さーじ。きゆら一 井一ぐわ しち。みいじ さーかち うるち どうぬ田かち いーてい。なっ、田ぐわ む一る 生きるんされちち。うんか 草刈ていぬまり、かいていち。

ちゆーけりんきや、わたしーち。ヤーかちなっ 草ぐわ はんげいてい行ききらんち。わた曲がてい さーしがえっ。

うんが まりか。うんが な一ちゃ行じゃんとう、みいじ一滴うていとうむんじゃわ。ちゃかた む一る。わんが行きゆ

んむんをば にち。みいじや、む一る なんか とうーてい。Fまさにゃが、とうてい。うっしゆてい さんとうきやが。は一つ、うんから わんにま な一ちゃやな。うんがちぎからや、な一な馬鹿らしあぬ ちゆぬほ一こ しーなていち。どうぬあぶしなげーり、どうぬ田かち みいじぬふえーるっか。くんでや、うんかハンシンむっち行じ。どうぬあぶし なげーり。みいじぬ ふえるっか。くんでや、草刈てい。ぶち草刈てい。うがし みいじ入一たんとうし。うにん2時、3時ごろベーヤかちかいていち。ハンシンむっち行じ、ハンシンかーでいかえっ。

わた しちゃんげか、くん荷い、いきやし はんげいてい きゆむかい一ち、しわしゆーむん あたんだ。わた うちちかるり。テイルや、しか うむや まるきやしー。ほ一う くり はんげいてい行きやだていか。

うがしか、うにんぬ金い。いきやしがちか、つわっきやあじゃた、植村(組の工事)(亀徳の)波止場。300ゐん、日当。日当300円しゆーたんとう。いやっきや あまた うにん きしや、6,000円し ノロうりしゆーたんとう(次項へ)。

(意訳) F叔父などは、言葉は丁寧に正直そうに話すが、裏では自分さえよければ良いという行いをした。田に水を引くために水路を赤土で補修しなければならない。それには参加しない。田に水を引いて家に帰って来た。再度田に行ってみると、Fが自分の田にだけ引いてあった。それからは食べ物(芋)を持って行き、水が入るまでは畦の草刈りなどして午後2時頃に帰った。腹が減っていると刈った草の荷物を背負って行けるか心配するものだった。

その頃、主人などは亀徳築港工事の賃稼ぎで日当300円もらっていた。君の母(嬸の姉)などは紬を織り切ると6,000円(1匹

きか1反(=3丈)かでもらっていた。

注

- 1) 用水路がしっかりしていない場所、取水設備が不十分な場所にある田は水を田に張るのが大変であった。筆者などもニシバル(西原)にある田の水引に何回か数えられないほどの日数ミジハラシ(水ひき・水路口の番)に行った。

9、草刈り

うんか、わっ、いきやしがやっちか。ナヴィンギヨ行じゃら、あがんが、ぜーとう。草ま あしが、あまんくま刈らんとちねーよ。フーバサから、うんから うんとぬ向こうぬ、ぬっちが、あまぬ(上野)直道にゃが田、うまんきや開発なたしが。ヤノ(八納)さんた むんきや うんとな あんせ、フンジユリや。うんから ぬぶーり

刈てい。キイチロ(藤田喜一郎)めいがむん行じ はんくち。あきしどん行じ はんくち。うんかキイチロめいが、うんと、ジキじゃいろいろ刈てい。また うんとぬぬぶりぬ あぶしなげーり。こーとういーぬタガチぬういぬ上たなま、刈てい。ティルぬしてい。刈てい しっちや、ティルうしくみ うしくみし。うんなてい ちゅーしりきり うち。うがし うんから さーかち うりていち。

うにんきや おとろあん。ふーん あぶしぬ うーむ しゅんとんきや ぬが をうんがら わからんご あたしが。うっしゅんと しーま、やっぱりマジムンち言ゅーむんや をうらむ。

フーバサンきやちか おとろあん、うんぬぶーりぬ道んきやちか、くらにし ガマにし

うがし、為(さん)。売ていあたんせ。ナオコーにゃが くわにがら、15万(円)し 道、便利がわーさむなてい。うんから うま行じ あきし。うにん はんぎいてい

ヤーかち きゅーたしがえっ。ふーん っわっきやがり 草刈り、タムンはんぎいり。

ちゅっけりんきや いきやしがやっちか、沖(現・沖島)ハルあかとう わったりナヴィンギヨかち行じゃんとうきやがら。ちゅっけりや、また、キヨ子とうわったり 行じゅーたんとう。ウィータカにゃが、ナヴィンギヨ、向こから にちえっ。ジキ山なてい キヨ子とうわって ジキや首って しゅんとなてい刈とうたんとう。「っいゃーきやや っとうぐわんきやじゃやー」ちゅてい、わきやにあびいてい えっ。っわっ、キヨ子とうわったりにやっ。わきやや、ジキぬ わーでいらどう刈りあんせね。ジキ山か うどうれあんせね。うがし刈てい。うんからナヴィンギヨぬトゥミケン(藤田富健氏・故人)た むん刈てい。うんから向こかち行じゃんとう。

「えーっ、っいゃーきや うっしゅん首てんしゅんジキ山かち ふえっち っとうぐわた さったんぎり ちまらんぎいあしが」ち、たんこぐい、っわっきやに あびいりちよ。しか、わってが、首つけしゅる ジキ山かち うがしゅてい あびいらり。

ちゅっけりや、また、ぬぶーりぬぶり刈ていぬまり、いきやしがやっちか、チョウユシにゃが むんたな刈てい。いきやしがちか、みティルがら、みしりきりがらはんくちえっ。うんから、ちゅーしりきりチョウユシにゃが田ぬ うま行じ充ちてい。うんからえっ、まるき しゅんちか。たーしりきりぬむん なたんとうきや。うりがしか ちきや草なたんとう、まるきぬ。うんと 荷ぢくり しゅんちか、うんとたっ切れいし。うんと また マギィアし くんじか、また うんとぬ たっ切りてい、かし また あむしー。ぜーとう 何くわいし うんから さんとう・・・。

(——電話だれん。電話、電話。

っわっきやや、みんな わーさん聞きや

らんだ。

——でんな おぼらだれんどー)。

まるきしゅーむ にーちされーえっ。うんから ぐいーぐじ しーなてい。むーる ゆくとうんせね、あしかでい。わってが、かっしゅん まるき。うがん とうっけらし うんと まるきし。荷づくり まんでいし さんとう。うんから、うりにちむーる わた くわてい あらんかや。

(意訳) 飼い牛の草刈りは日課というほどで、あちこちでした。今であればマジムン(ハブ)がおりそうで怖いところでも平気で刈って歩いたが幸いハブに咬まれなかった。ある日などキヨ子(藤田)と二人でススキ原の首が出るくらいの場所でススキの若芽を刈っていたら、集落の人が心配して声をかけた。若い者が事故にあったら大変。当時は多くの人々が草刈りをするので草が少なく、短いのを刈ってあった。それを束にするのが難しく、四方八方から草紐でたばねていた。休憩していた人々が笑っただろうと思った。

ほとんどの家に役牛がいたころは多くの人々が草を刈るので、道路沿いなどに今のように草は生えていなかった。筆者なども小学生の頃から草刈をさせられた。

10、紬織り始め

うんから っいやーきゃ あーじゃがえっ、
「ばー、ばっ、ノロぐわ(注1) うりんじょくねりや」ち、わんに、かし言ゅーたしが。
「っわっきゃ、ノロぐわ うたんてい。あじゃが、植村ぬ築港行じか300円もーけいむなてい。金いもーけいらちか。うりやさーらむなてい。植村ぬ金い儲けいんきゃぬ ねんごなていか ノロぐわんきゃ 習ろや」ち。

っわっきゃ昭和38年ぬ10ぐわちからどう、習ろいちけたしがえっ。うり うが

し あむあたんだ。っいやきゃ あーじゃた、っわっきゃが はんぎいりゆむ にーち きむちゃげあ にーちされー。

「ノロうりんじょくねーりや。ノロぐわうていか ぬが」ち、っわんに言ゅーたんちよ。

「ノロぐわま うりちゃーま あれるしが、っわっきゃにや、うねちかくねち ノロうららむなてい」。

(意訳) 義兄(筆者の父)から「紬織りはできないか」と言われた。「主人が賃仕事で稼ぎに行っているから家の仕事をしなければならぬ。主人の仕事がなくなれば織るのを習おうと思う」と話した。それで、昭和38年10月から紬織りを習い始めた。

注

- 1) 「ノロうり」は布織りが直訳だが、紬織りを指すのが一般的である。
- 2) 井之川にも紬工場が昭和40年前後には5棟ほどあったように思う。大正時代には染物工場などもあったようである。

11、夫の労働

うんから、金いや ねーり。秀夫が鹿児島行じゅりがら(注1)、だー行じゅりがら、金いじまりしー。うんから、お父さん300ゐんし、いちばーん働きゅんちゅどう、へろち言ち、上いぬ岩盤から行じ。チッチあがんむっち行じ。なんきゃにし あむやあり。原打ちとーち、ちゅんきゃぬ ちゅりな もーりさんちゅていま言ゅーたしがやっ。原打ちとーち、うにん くんてや、スコップし、うり むーる へろち。ちゅっきり、ちゅっきり あむ あんべちよ。うがしか、鹿児島ゐんがぬ、
「なんさーぬ人は 何しちよるんじやー」ち言ちから。気張りちゅや、いっきゅた入ーてい 充ちるしが、ずぼらむんきゃ、なーらゆか入りきらんせね。うがしか、へろぬ何番へろち、番号がちゅちゅむなてい

や。1、2、3ち並びなていやっ。
「何番へ口ていごろあや、人は何しちよるんじゃー」ち、うがし あびいるたんち。鹿児島語しやっ。うりが あびいるんちゆてい、つわっきゃ あーじゃや、ヤちゆていうがし言ゆーたしがえっ。ゆんばりむんべーかてい。時間ぬちか うーむんや走りあんせね。むーるが むんや 一杯なてい走ていか。うりべー なーら あんせね。うまぬちゆや、ぬーしゅんがち あびいらり。うがし つわっきゃ あーじゃたや、だー行じま気張るむんなてい。15円昇給さてい、315円。

——15円。

15しんされー（注2）。

——あれら。うんとうきや、昭和30年代なてい、15円だれんだ。

300みんなてい、315みんあし。15しんあらんかや。アキチュたな、うむし300みんしゅーたんきいやっ。Mさんがキャンデー自動車な。フクにゃが、昭和何年がいー。40年、Mさんがキャンデーしゅーたんせえっ、ヤーなてい。全島かちキャンデーうるしゅたんせえっ。うりが、アキチュたな行じゃんとう、300みん あたんちよ。しよーてい行きぬ ていまよ。自動車ぬていまよ。フクにゃが行きなてい、Mさんたんだんとう、まじな行きなてい、ぬしてい もろたんとう。つわっきゃ伯父さんや、500みん札 とうらち、
「また なんか きゅんとうきや、たんばつてたぼれ」ち。栄良に、
「きゅんとうきや、くり たんどうけい。なんか きゅんとうきや たんどうきいよー」ち。とうらち。うにん300みん しゅーむん あたんだ、アキチュんたな、車賃ぐわ。うがし じき。

——植村あていか、なーかにま 賃めいやゆたーあていあれらや。3,000円。

300みん。

——車賃とう、1日ぬ賃めいとうや、みんさあれていや。

みん、みんさべ あたんちよ。うんから、500円とうらちゃんとう、
「かつさんげがり、ふーあん」ち言ちゃんとう。

「また、たんばつて くーりよ」ち。うにん、伯父さんや、最後あたしがえっ。

（意識）体格がよく、徴集され海軍に服役。鍛えてあったので良く働いた。賃労働でも気張るでのノルマを果たした。仕事も困難なところにもやらされたようだ。へ口というトロッコのような物に土砂を入れるが、個人の力量によって車によっては一杯にならなかった。

注

- 1) 長男で高校時代を鹿児島で過ごした。
- 2) 銭と円の単位に混乱があるようだが、そのまましておきたい。

12、背負い売り

(1) 米売り

うんか わんが言ゆんせえっ。くめいぐわ ぐしゅう はんげいてい行じ、ヨシテイめいに売ていか、100円なてい。うんか、よそめぐていか、120円し売らりなてい。うんから まーじ うんめぐら めぐてい にーちにゃんまち。ヨシテイめいがツヤぐだーり。ヨシテイめいや、ヤーなをうてい。うんか くだーりうりてい。くま行じ、くんめぐらぬヤー。金いむちぬやなてい こーゆんがら あていねんち言ち。くんでや、階段ぬあんツヤあたしが。かし行じゃんとう。つわっきゃ、きしや8時や、あま行じゆんでね。靴くみ しゅーたんちよ、玄関なてい。うんちゆや。
「くめいぐわんきや こーえらんせ」ち。金いむちなてい こーゆんがら あていねんち思たんとう。

「はーっ、くめいぐわや、いれら。わきや

や いらんヤーだれん。つくとうむなてい」
ち、っわんに言ち。うんから うんちゅぬ
言一じゃわ。あり秋武さんあていか、たん
かあてい あらんかやち思ゆしが。

「くんめぐらぬちゅや、むーる作人ぬ、く
めい つくとうむなてい。こーゆんちゅや、
こーぬ向こう行じか こーゆんけい。い
やっ あがん はんげいてい行けい」ち。
うがし わんに語たんとう。はー、かしに
しか、あむなていち。ニキろかんぬ あた
んせね。うま行じ うるち。うまぬ をう
らんとうきや、ヨシテイめいがツヤかち
100めんじち うるしゅたしがえっ。100め
んがら、70めんがら あたしがえっ。

——いっしゅう。

いっしゅうよ。ふーう、金いぐわ ねん
ぐとうに。栄ちゃん、月謝（注）。金いぐわ
ねんご。70めんがら、あむしゅむだ。うに
ん、いやっきや月謝が2めん。2めんど
うしゅーむん あたんちよ、うん2めんぬ
金いぐわ ねーむ あたしが。うがし く
めいぐわ はんぎいてい行じ、とらちゃん
とう。

植村ぬ工事しゅんとぬ 炊事場かち行
じゃんとう。

「くめいぐわんきや いれらんせ」ち言ち
ゃんとう。

「いるん」。えーっ、いっこいさんち 思
てい。120めんし売らりゅんがらあていね
んちさんとう。

「つうり 給料たな待ちたぼらんな」ち
言ゆーり。

「ほう、っわんな、あちゃ うむしゅん金い
なてい。給料たな待たらん」ち、または
んげいてい。また 元ぬヨシテイめいたヤ
かちしっち。100円しがら とうらちゃし
がえっ。はーっ、アキチュシマじゅう は
んぎいもーらち。

(2) サツマ芋売り

ハンシンはんぎいり。アキチュちゅん

きや、

「ハンシンぐわんきや いれらんせ」ち言
ちか、

「ゆたーれるん」ち。うんヤ行じま、くん
ヤー行じま「ゆたーれるん」ち言ゆんとー
あしが。キノや、「たーれるん」ち言ゆん
せえっ。うがしかよ、ちゅっけいぶりぬヤ
や、「ツワーちかのとうんけい」ち、こー
たんちよ。うんから、カメイジぬイトウマ
ン行じ、70しん（円?）し売ていにーちだ。
ふーう、アキチュシマじゅう めいぐてい
売りらんご、また、カメイジかち はん
げいてい行きでね。はーあ難儀やしーあ
よ、っわっきや（笑いながら）。

うがさんとう、また、キンセイ店屋ぬ、
沖縄ぬ（人々ぬ住む）。うがん行じゃん
とう。

「ハンシンぐわんきや こーいしょらんせ」
ち言ちゃんとう。あーまがいていち、
「あーあ、ハンシン こーえるん」ち言ち
ゃんとう。裏かち行じ こーゆわち思たん
とう。いろは屋から くだーり うりてい
行じ、なぬ ニシダぬうま、あま。むとう
イトウマンヤあたんせ。後ろや浜しか、
イトウマン部落（集落）あたんせ。うまん
たな はんぎいてい行じ。うにん。ティル
みーぬハンシンだ。うまなてい いきやし
がやちか、80しんがら、いきやさがら あ
たしがえっ。

——1斤が80銭だれんや。

ティルみーし80しんよ（うがしか80円
じゃ）。1斤が 80めんがら、80しんが
ら、っわっきやなっ うべいらしがやっ。
うり うがし売てい。

うん金いぐわ、ちこいきらんご。うんな
り。トーフぐわ ちゅっきり あたんてい、
ぬーぐわ ちゅっきり あたんてい。あ
めいだま1しんし かつしゅんコンペイト
ウえっ、とうーこーやるむ あたんちよ。

——1円じゃろ。

1 ゐんしがら、とうー こーやるむ あたしがやっ。うり うむぐわ、ていーち こーてい しんび きらんご。

うにん また カンニバルかち しっち。また ヤかち はんぎいていきーで。

あーとうき ふえーあ行きなていやっ。シュダ ぬぶーり行きゅんとうきや、シュダ・ワセイわれんぐわきやぬ しにや、かし曲がていやっ。しぎよるあや あり、しに曲がていやっ。けんどぐだーり きゅーたしが。っわっきやま、裸足しどう行きでね。うがし はんげいてい行じから、あっきゅんげにし、ねいちが いじりなてい。

昔や、なーにシアスファルトや しーねり。フンニヤグ石あんせね。しにや、痛ちゃーり、しぎよるあや、あり。ふーう、うがし 初めいぬ うちや、しぎよるつけち、しにぬ しゃんわた うむしゅしが。

(3) 知恵を働かす

うんから しょーでい いじてい。カンニバルなてい ハンシンふーてい。テイルな ゐしてい。キノから なーどう行じ。うんから、はんぎいてい シュダぬぶーり行きゅてい。うがし行じ、売てい。うんから、ハクゴバンシンぬ、かっしゅんハンシンぬ、フルフルし、ちゅーむとう うっちか、たーちま みーちま さがてい。ちよーう、畝いぐわ半分べしテイルみーなり なていやっ。うがし はんぎいてい行じか。

かいりや、いきゃしがちか、ヤーかち来ーや、ヤぬはんめ。ウーバンシンや、むーる より分けてい。くわーハンシンぐわべー はんぎいてい、カンダまるき せーせ。うがし また ヤーかち きゅーていだ。

(4) 経済状況

——栄ちゃんが、いくちんべーありだれんが。

栄ちゃんたや、きさ、なー、中学校1、2年べーあたわ。じぎょう料2 ゐん入ーる

る金い ねーだたんた、うん時期や。卵ぐわむっち行じっか、2 しんぐり。3 しん(2円か3円じゃろやー)。3 しんか2 しんぐいんと思ゆしが。ネギぐわ むっち行じが15 ゐんし売らるてい。うがしなてい3円じゃやー。15 ゐん ネギぐわ かーんべぐわむっち行じか。

——卵どう たーれたんど。

卵ぐわや、ていーちしどう、2円50しん、3 ゐん なてい。とうーむっち行じかどう、30 ゐん あしえっ。3 ゐんし売ていか 30 ゐん。ぎにゃーむんや、25 ゐんよ。

——ネギどう たーあれたんど。

ネギぐわ、いちか あむしか、15しん(円) とうらるむなてい、ゆたーあたんしじあし。いじはなちよ、うりが。うんかデエクニぐわぬ、かっしゅむんぐわ みーち15しん。みーちか、ゆーちんべな、うっしゅむんぐわ。また、ふえーあむんが くんじむっち 売りが むっち行きゅたしがえっ。

(意識) 急に現金が必要になった時など米や芋などを背負って亀徳や亀津に売りに行った。その時の体験談である。ちょっとでも高く売れないかと家を一軒ずつまわる様子を話している。また、芋売りの体験などである。芋はイトウマン部落(糸満の人々が集まっている亀津の区画をさす)に売った。

現金収入の難しい時代であった。農家にとっては米と砂糖を売った時がまとまった金が入る時であった。あとは、バナナ、ネギなどを作っている家では亀徳、亀津の店などに採れる時期に売る程度であった。

注

1) 月謝はないが、学級費などをさしている。

二女は筆者の同級生である。昭和32年から中学生である。その頃の話。筆者の母など他のことは忘れても朝、急に昭和24年生の娘が学校へ持って行く金の徴収袋を出した

ら金がなく豊山豊忠義兄宅に借りに行ったことを話している。

- 2) 藤久子姉（昭和6年生、筆者の長姉）は、15kmほど離れた山（さん）集落などから塩を籠に背負ってきて家で一休みして亀津に売りに行ったと話す。

13、収入の事例

(1) 生活費の回転

はいー、っわっがり金いぐわねんご。金いもーけいち言ゆむんや ねーり。くめいぐわ売てい小遣いぐわしーか。サタ金いぐわし 配給米ぐわ とうーていえっ（こーてい）。うっしゆていどう 生くわつしゆーむん あていあらや。

二期作ぐわ とうていから、いきゃしがやちから、ウギ金（注1）いぐわし。ウギ金いぐわま みんなら作ていから ウギ金いぐわし くめいぐわ、配給米ぐわ こーていかーでいか。

うにん くんてや、また アキシ。アキぬ とうらり なーていか。

(2) 小作（うけいり）

ムリマシ（森増）、シモゴ（下川）。いやっきゃむん うけいとうていか。120斤しがら うけいとうたしが。ムリマシ、うけいとうたしが。ムリマシぬ先とうらるむなてい。うりおば、へえく かてい。うむし、アキシばんめ とうてい。うがしか、うんかムキナ、アキシか。うにん また いやっきゃヤかち、あじゃ、はんぎいてい行じか。っいやきゃあじゃや、倉な かつしゆんバナナさげいてい あーていか。

(3) バナナの思い出

バナナ、かし切ち かめいち。っわっきゃおとさん（夫・栄良氏・故人）、どんちゅら かみきらんぐとうに、みーちんべ。いきゃさんべ もろゆんがら、もろていか。っなり かーでいか かーでいぬ残り またむっち しっち、ヤかちえっ。バナナぬ

かつしゆんバナナぐわんきや かまちゃむ、きぬに しゆんだ。っいやーきやあじゃバナナつくとうたんせね。

杉原（さん）。コーバラじゃ、ムキナじゃら つくてあてい。杉原（さん）ち言ち、バナナこーゆんちゆぬ をうんせ。こーゆんちゆぬ をうたしが、っいやーあていねや（ブマ）。ブマな。なーま こーとうんだ。なー、うんちゆ、爺ぐわなーとうむあし。あねー、あんちゆ むとうバナナこーゆたん杉原さんち言ゆんちゆ あたしが。

「っうりや」ち言ちゃんとう。

「うりだ」ち、言ちゃんちよ。

「はーっ、やっぱり、とうし とうーていか わからんご なるむんじゃや」ち言ち。昔から、あむし こーゆたる 杉原（さん）ちがら、上原（さん）ちがら ぬちがら、杉原ちじゃろ。はなちゃしがえっ、っいやーきやあーまが。

「えーっ、かわとうむじゃやー」ち。やっぱり っわっきゃが とうしとうるんがにし、向こぬちゆま とうし とうーとうむ ういーむんぐわ なーとうむ かわりちゆなとう（笑い）。うり まるきーり とうむんぐわなてい うむしゆーたんせえっ。っわっーはり なたんとうきや、うりが青年時代なていやっ あむあたしが。

（意識）甘蔗の収入で配給米を買ったり、先に収穫できる米を食べながら次々と田の収穫もした。土地を小作もしていた。バナナをもらったら、残して家に持って来た。杉原さんというバナナを買った人の思い出で等々生活の様子を話している。現金収入の大変なことなどである。

注

- 1) 徳和瀬に大型製糖工場が建てられ昭和36年12月から操業開始。キビ代になった。

14、お茶を

いちゃ湯ぐわ あていま あむしーたむ。
——いいーかたりぐわ せーたんど おぼ
らだれん。

(意識) お茶を勧める時に「熱い湯でも」と言っている。話に夢中になってお茶もださなかったこと。シマ(集落)では雑談などすることを「カタロイ(相互に語り会う)」と言う。この機会が伝承の場である。

15、空襲で燃えた

(1) 学校の様子

戦死さーる 額、飾てい あたしがえっ。
むーる めーちゃしがえっ。

——うりや、小学校ぬ めーるむ にちゃん
ん訊いだれんや。

ゐん、ふーう バリバリ機銃射撃 しー
ちけていか。うりうり にんじゅぬ さー
から にーどう さーるんぬ。たっちがり
にーきるむんじゃわ。やははり さーめい
ち思てい。うがしから、カンニがっこう
撃っちから、八之峯ぬ 学校にーち バリ
バリーち行き行き。

——爆弾や はんとうさんご?

機銃。機銃。焼夷弾 ガソリンまーち。
うにん機銃しーか バリバリめーり あん
せね。うがし はじめい南校舎ちっしっ、
うんがちぎ また あまだけ のーとうた
んちよ。北校舎や、のーとうたしが。北校
舎たな やらはってい、

「あねー、学校 むーる 焼け野が原なてい
あね」ち言ち。あむだけ(奉安でー)の
てい。奉安殿だけ のーたしがやっ。

(2) 戦後の学校再建

また、うんから生徒んきゃ 学校行きゅん
がにし なたんげーか。きゅーま あちゃ
ま毎日、作業しーあんせえっ。しまいや、
洗面器むっち行じ、イナグはんぎいり、カ
バンな いなぐ はんぎいり。っいゃー
きゃまイナグはんぎいたんぎいや(あんま
り うべいれら)。っわっきゃ秀夫たま行

じ(っわっゆま うっとう あれらや)。
秀夫たが うん時期、っわっきゃ秀夫、24
年っまーりなていやっ。

——きさ、学校や、できとうていよ。っわっ
きゃ、ゲイヤ茸きぬ、あん マタバラヤ
ドゥリぬどうるぬなーだれんだ(教室に雨
水入った)。

マタバラヤドゥリなてい。っいゃーあま
かち行じ、マタバラヤドゥリなをうてい。
カンニ学校かちしっち。カンニ学校か
ら、また あがん行じ(現在の井之川中
学校)。っわっきゃ栄ちゃんた 行きゅたん
せえっ。

(意識) 学校が機銃掃射を受けて燃えるの
を溝の中から見ていた。ガソリン(灯油?)
をまいて機銃掃射すると火がついた。奉安
殿だけ残った(建っていたのは、昭和18年
生の筆者なども記憶に残っている)。

学校が燃え、生徒は毎日作業ばかりであ
った。家から道具を持って行き、浜から砂運
びであった。

戦後は、萱茸校舎で地面の上に手作り机
椅子を置いて勉強した(筆者などの小学校
時代である)。天城町のゆいの里広場に茅
茸校舎が復元されている。

御教示の終わり

——8時なてい、おぼらだれん。

ぬっぐわあてい かーでい たーむ
えっ。

——いっばい もろえてい。

(意識)「午後8時になった。有難うござい
ます」。「何でも食べれば良いのに」。「一杯
頂きました」。

16、おわりに

17年間の時の流れは記憶をかなり忘却の
彼方へ押しやるようだ。キヨ姫は特別なこ
と以外は多くのことを忘れておられる。そ
れが自然のうたなのかも知れない。

奄美民俗文化の記録は、研究者の関心に

よって詳しく研究されている民俗事象もある。人々の生活史（誌）の視点で見ると、民俗事象に対してどう対応したのか、日々の暮らしの様子はどうか等々資料の収集が必要なことも多い。

筆者なども民俗文化の収集は、詳しいと思われる話者の語りをもとに事例を提示したりするが、文化研究という名のもとに伝承し、話した人間の記録（生活史・誌）、研究が少なくおろそかにされてきたのではないか。名もなき文化を担った人間研究の必要性を痛感するものである。その収録がある事象（くうしゅうどうき・空襲時、太平洋戦争時期・大東亜戦争時代）を中心に聞き書きすることも今ならできらるだろう（例えば「語り継ぐ戦争」南日本新聞のシリーズ等）。